

巴金『資本主義からアナーキズムへ』の 成立過程に関するノート

新 谷 秀 明

『資本主義からアナーキズムへ』（原題『従資本主義到安那其主義』。以下『資本主義から』と略す場合がある）は、巴金が1930年に上海の自由書店から「芾甘」の名で出版したアナーキズムの啓蒙書である。自由書店は1927年に李石曾らの出資により設立され、アナーキズム関係の書籍および雑誌『革命週報』、『自由月刊』等を発行した出版社である。巴金は1928年末にフランスから帰国したのち、自由書店の運営の一翼を担うようになった。自由書店に参加してからの巴金はほぼ独力で『自由月刊』を編集、また「自由叢書」としてクロポトキンの著作『パンの略取』、『人生哲学——その起源と発展』、『ブルードンの人生哲学』等の翻訳出版、および『断頭台上』、『革命の先駆』等を編集するなど、執筆者・翻訳者・編集者として積極的な活動をおこなっていた。

『資本主義からアナーキズムへ』はアレクサンダー・バークマン（Alexander Berkman 1870-1936、日本ではバルクマンと表記されることもある）の著書『アナーキズムのABC』を下敷きにしたものではあるが、1920年代中盤から1930年前後にかけての期間に残された巴金のアナーキズムに関する言論の中では、比較的まとまった形で彼のアナーキズム観を知ることができる唯一の文献と言える。しかも巴金はかつて、この本は「私個人の心血が染み透った」唯一満足できる作品であると語ったことがある⁽¹⁾ほど、この本に対する思い入れは強かった。

しかしこの本はアナーキズム革命の原理と実際を一般庶民に向けて解説するという極めて実践的かつ刺激的な内容のため、人民共和国時期においては当然

ながら巴金の各種著作集には入らず、人民文学出版社版『巴金全集』にも「序」のみしか収められなかった⁽²⁾。共和国時期のみならず、1930年の出版直後からすでに国民党当局によって禁書扱いにされており、当然ながら初版本しか存在しない⁽³⁾。つまりこの本は重要な著作であるにもかかわらず長らく一般読者の目の届かないところに隠匿されてきた著作であった。このような事情であることから、この著作に関してこれまで研究者から言及されたものも多くはなかった。しかし2009年になり、巴金研究会の尽力によりこの書籍が「巴金研究叢書」の一冊として香港文匯出版社から再び出版され、ようやく『全集』の欠陥を補うことができたのである。本稿では、『資本主義からアナーキズムへ』と『アナーキズムのABC』を比較することにより、巴金がどのような過程を経て『資本主義からアナーキズムへ』を書き、そこにどのような取捨選択があったのか、基本的な輪郭を明らかにしたい。

1. 『資本主義からアナーキズムへ』「序」より

巴金がこの本を書いた動機や執筆の背景などについて、今のところ最も多くの情報を伝えているのが、巴金自らが書いた「序」である。そこで「序」の概要をできるだけ原文どおりに次にまとめてみたい。

「アナーキズムに関する読むべき書籍にはどのようなものがあるか？」という問いをあちこちからもらうが、中国にはアナーキズム理論と実際をきわめて易しくまた系統的に解説した本はほとんどない。中国におけるアナーキズムの宣伝活動は二十年以上の歴史があるのに、いまだに正確にアナーキズムを理解している人は少ない。私はアナーキズムを正確に解説する本を書く計画を立てていた。ここ数年運動の戦場から退役して、ヨーロッパで書齋の研究生生活をしていたが、そのときにゴールドマンと文通し、このことが話題になった。ゴールドマンは、パークマンがそういった本をちょうど執筆中であるから、将来それを訳してくれたらいいと私に言った。

私がパークマンに会った時は、病気のためにまだその本を書き終わっていませんでした。私自身の計画していた本も、多忙のためあらすじを書いただけでいまだに起稿していませんでした。帰国後、今年になってようやくパークマンの『アナキズムの ABC』を読んだ。パークマンの著書は最近十数年間、即ち第一次世界大戦やロシア革命の経験を充分に取り込んでいて、アナキズムの新しい戦略を伝えるものであった。また非常に簡明で通俗的なスタイルで書かれている。ただし私はパークマンの書を翻訳したのではなく、自分の本を書いたのだ。便宜のためほとんどの論拠は彼の本から書き写したが、常に自分の言葉を使い、自分の主張は彼とは違う部分もある。本の構成については彼の本をなるべく模倣したが、章をいくつか削りまた新たにいくつか書き加えた。それは一つには彼の本がアメリカの労働者向けに書かれていたから、二つには彼の考えが理想主義的すぎる部分があったからだ。私は基本的にクロボトキン主義者なので、私の主張がほかのアナキストの主張と異なる部分があるかもしれないが、それは許していただきたい。私はクロボトキン主義者にすぎないのだから。私はいまや戦士ではないので、この本には扇動する情熱が欠けており、理論の解説だけしかない。この本は宣伝の本ではなく解説の本である。その目的はただ、わかりやすい言葉で人々にアナキズムは何であるか、また何でないかを説明することである。

ここに書かれている「運動の戦場から退役」「ヨーロッパで書斎の研究生活」云々は1927年から28年にかけてのフランス滞在を指している。フランス渡航前から滞在中にかけて、巴金が「精神上の母」と称したほど大きな影響を受けたアナキストのエマ・ゴールドマン (Emma Goldman 1869-1940) と頻繁に文通していたことが知られている。巴金が「アナキズム理論と実際をきわめて易しくまた系統的に解説した本」を書く必要を感じていることをゴールドマンに語ったところ、ゴールドマンはパークマンが同種の本を執筆中であることを教えてくれた、という経緯がここで語られているが、山口守氏の書簡調査⁽⁴⁾によれ

ば、1927年5月26日付ゴールドマンから巴金あての手紙にバークマンがそのような本を執筆中であることが書かれている。加えて1927年7月18日に巴金からバークマンへ、7月25日にバークマンから巴金へ宛てて書かれた手紙がどちらも現存しており、その内容を見ると確かにバークマンが執筆中の「アナーキズムに関する本」が話題になっていることがわかる。なおこの往復書簡からは巴金のフランス渡航前から手紙のやり取りが始まっていたことが確認できたり、バークマンの『獄中記』(Prison Memoirs)、『ボルシェヴィキの神話』(Bolshevik Myth)の翻訳に関するやり取りも見られて興味深いが、これらのことについては煩を避けるため本稿では省略する。

また、「序」の中でさらに興味深いのは、バークマンの著書が「第一次大戦やロシア革命の経験を充分に取り込んでいてアナーキズムの新しい戦略を伝える」ものであり、巴金はその点を評価していることがわかることである。この点は以下に述べる内容分析の結果でも確認される。

2. アレクサンダー・バークマンと『アナーキズムのABC』

次にバークマンがいかなる人物かについて紹介する必要があるが、上述のように巴金とバークマンの間にはエマ・ゴールドマンの存在がある。巴金は15歳のときにゴールドマンの『無政府主義論』を中国語訳で読んで以来大きな影響を受け、「精神上の母」とまで称していたことは、ゴールドマンに語りかけるスタイルをとる『給 E.G. (E.G.へ)』⁽⁵⁾によって知ることができる。『給 E.G.』にはE.G.のほかにA.B.という人名が出てくるが、これがアレクサンダー・バークマンである。バークマンはゴールドマンの同志であり生涯のパートナーであった。

アレクサンダー・バークマンはリトアニア生まれのユダヤ人、18歳のときにアメリカに移住、アナーキズム運動に従事する中で同じリトアニア出身のユダヤ人であるゴールドマンと出会う。1892年にはピッツバーグにおけるゼネスト中に殺された労働者の報復のため、資本家ヘンリー・フリックの暗殺を敢行するが失敗し、その後14年間を刑務所の中で過ごす。バークマンの釈放後、ゴー

ルドマンとバークマンは再び行動を共にし、徴兵制反対運動を組織したことが原因で再び逮捕される。釈放後、1919年には二人ともアメリカを追放され、ロシアに移住する。ここで革命後ロシアの惨状を体験し、ボルシェビキによる革命後政権に大きく失望したことが、その後のボルシェビズム批判につながっていく。1921年にクロンシュタット水兵の反乱が鎮圧されたのを契機にロシアを脱出、ドイツ、イギリス、フランス等を渡り歩く。巴金がフランスに滞在していた期間はゴールドマンとバークマンもフランスにいた。この頃からバークマンは前立腺の病気で苦しむようになり、1936年には2度の手術を受けるが好転せず、フランスのニースで病気を苦にピストル自殺をした。巴金は「序」の中でもバークマンの病気に触れている。

では、巴金が『資本主義からアナキズムへ』執筆の際の基礎にしたという『アナキズムの ABC』とはどのような書籍であったのか。この本の初版は1929年5月にニューヨークの Vanguard Press 社が出版したもので、*Now and After: The ABC of Communist Anarchism* という題名であった。またこの出版社は同時にこの本の縮刷版を *What is Communist Anarchism?* の題で出版しており、二つの書名が存在しているが内容は同じである⁽⁶⁾。1937年には同じくニューヨークの Frie Arbeiter Stimme 社がゴールドマンの序文を追加して再版を出している。1972年にもニューヨークの Dover Publication が第三版を出しており、このときには Paul Avrich による新たな序文が付け加えられている。また、最近のものではフロリダ州セントピーターズバーグの Red and Black Publishers が *The ABC of Communist Anarchism* の題で電子ブックコンテンツ及びオンデマンド出版物として提供している。このように現在に至るまで何度も版を重ねている書籍であるが、序文の付加を除けば内容的に異同はないものと思われるので、以下、書名を巴金の記述に従って『アナキズムの ABC』（または『ABC』と略す）で統一する。なお、日本語訳には久田俊夫訳『アナキズムの ABC』（1981年4月、杉山書店）がある。

3. 全体構成の比較

巴金は『資本主義からアナーキズムへ』の論拠と構成はほとんど『アナーキズムのABC』を模したもののだが完全な翻訳ではないと「序」で述べていた。ではどの程度模倣したのか、あるいはどのような独自性があるのか。それを明らかにするための基本的な作業として、両テキストの比較を試みた。まず全体の構成を対照させてみた結果が下の表である。空欄は対応する章がないことを示している。

Alexander Berkman <i>Now and After: The ABC of Communist Anarchism</i> Vanguard Press, 1929			蒂甘『從資本主義到安那其主義』		
	Chapter	各章の題目		章	各章の題目
		Forward			
		Introduction			
				序	
Part One NOW	1	What Do You Want Out Of Life?	第一部 今日	一	你一生最想要的东西是什么
	2	The Wage System		二	工钱制度
	3	Law and Government		三	法律与政府
	4	How the System Works		四	这制度怎样工作
	5	Unemployment		五	失业
	6	War		六	战争
	7	Church and School		七	教会与学校
	8	Justice		八	正义
	9	Can The Church Help You?		九	教会能够帮助你吗
	10	Reformer and Politician		十	改良派与政客
	11	The Trade Union			
	12	Whose Is The Power?			
	13	Socialism		十一	社会主义
	14	The February Revolution		十二	二月革命
	15	Between February and October		十三	从二月革命到十月革命

	16	The Bolsheviki		十四	布尔塞维克
	17	Revolution and Dictatorship		十五	专政与革命
	18	The Dictatorship at Work		十六	专政的把戏
Part Two ANARCHISM	19	Is Anarchism Violence?	第二部 安那其主义		
	20	What is Anarchism?		一	安那其主义是什么
	21	Is Anarchy Possible?		二	安那其是否可能
	22	Will Communist Anarchism Work?		三	在安那其主义的社會中
				四	阶级斗争
				五	革命的安那其主义
	23	Non-communist Anarchists			
Part Three THE SOCIAL REVOLUTION	24	Why Revolution?	第三部 社会革命	一	为什么要革命
	25	The Idea is the Thing		二	社会革命
	26	Preparation		三	预备
	27	Organization of Labor for the Social Revolution		四	工团的职务
	28	Principles and Practice		五	原理与实践
	29	Consumption and Exchange		六	消费
	30	Production		七	生产
	31	Defense of the Revolution		八	革命之防卫

これを見ると、確かに『アナーキズムの ABC』の章立てがほぼ踏襲されていることがわかるが、対応していない部分もある。『ABC』の第11, 12, 19, 23章に対応する章が『資本主義から』にはない。逆に『資本主義から』の第二部第四、第五章に対応する章が『ABC』にはなく、この部分は巴金の手によって独自に書き加えられていることが明白である。このうちのいくつかは比較的重要だと思われるので、のちに述べることにする。

4. 改作状況

文章の細かい部分から見ていけば、完全に翻訳している部分、やや手を加え

ながら翻訳している部分、大きく削除している部分、大きく言葉を加えている部分など、その程度も方法も多種多様な状況がある。このような言い方は正確ではないかもしれないが、あえて言えばパークマンの文章全体のおよそ6、7割程度が忠実に翻訳されているように思われる。その他の部分は何らかの書き換えや削除や加筆がされているとあってよい。

巴金が書き換えをおこなった理由も様々であることが想像されるが、明らかに理由があって書き換えている場合、おそらく次の四種に分類できるだろう。

- (1) 中国語訳の際の表現上の都合で書き換えたり、わかりやすく書き換えたりした部分
- (2) 原文が中国の事情に合わない場合、実際の状況に合わせて書き換えた部分
- (3) パークマンの主張に同意できない場合に書き換えた部分
- (4) その他の理由により書き換えた部分

(1) の状況は一般に翻訳をする場合に多かれ少なかれ存在することだが、この場合巴金は忠実な翻訳をすることを最初から放棄しているのであって、かなり思い切って表現上の工夫をこらしているように見受けられる。一つの例を挙げよう。

They were persecuted and hounded and executed in the manner of those days. Sometimes they were put on a big cross and nailed to it, or they had their heads cut off with an axe. At other times they were strangled to death, burned at the stake, quartered, or bound to horses and slowly torn apart.

This was done by the church and the school and the law, often even by the deluded mob, in various countries, and in the museums today you can still see the instruments of torture and death which were used to punish those who tried to tell the truth to the people. (Chapter7. Church and School)

处死の方法は依当时的情形而定的。有时他们被钉在十字架上, 有时被斧子砍掉头。有时他们被绞死被烧死在火柱上, 或者被凌迟, 被五马分尸。现在最干脆最“文明的”办法就是坐电椅。

直接间接使他们至于此的除了专制暴君残酷官吏之外还有教会, 学校, 法律, 有时甚至是由一群受骗的乱民来干这事的。今天你在博物馆中还可以看见种种拷打和处死的刑具, 用来惩罚那般传播真理的人。

下線を付した部分は原文にはなく, 巴金が加筆した個所である。

(2) については, 例えば次のような例が挙げられる。

Justice and equality can exist only among equals. Is the poor street cleaner the social equal of Morgan? Is the washer woman the equal of Lady Astor? (Chapter8. Justice)

平等与正义仅能存在于同等的人中间。难道一个穷的黄包车夫在社会上的地位可以和虞洽卿先生平等吗? 难道一个女工可以和主席夫人或名媛之流平等吗?

ここで“street cleaner” “Morgan” “Lady Astor” 等の名詞を「黄包车夫」「虞洽卿」「主席夫人或名媛之流」に置き換えたのは, 明らかに中国の読者に配慮してのことだと考えられる⁽⁷⁾。

(3) の主張の違いによる改作が最も注目すべき個所だと思われるが, これについては後回しにして, まず(4) その他の理由について述べておきたい。

(1) から(3) に当てはまらない種々雑多な理由が存在するのだが, 例えば Chapter8. Justice の後半において, バークマンは相当な紙幅を費やしてシカゴのヘイ・マーケット事件とサッコ・バンゼッティ事件について詳細に述べている。巴金はこの部分をかなり荒っぽく省略した上, 次のような記述を加えている。

芝加哥の悲劇和薩凡の慘案在我的《斷頭台上》一書里都有詳細的記載，如果你還不大清楚這些事件，你可以去翻看那書，我在此處使用不着向你解釋了。不過你要知道這樣的事不僅在美國是有的，在別的国家內也是有的，譬如拿中國來說，如黃龐慘案，二七慘案……

『斷頭台上』は1929年1月に自由書店から出版された書籍で、編著者は芾甘すなわち巴金である。『斷頭台上』は第一部「斷頭台上」、第二部「自由血」に分かれており、第一部にはロシア革命の中で主義に殉じた5名の英雄的人物が、第二部にはハイ・マーケット事件とサッコ・バンゼッティ事件をはじめ、和田久太郎、古田大次郎など日本のアナキストまで含めた比較的新しい時代の殉難者たちの事跡が描かれている。巴金は自らも強い関心を抱き続けているハイ・マーケット事件とサッコ・バンゼッティ事件が『ABC』第8章に登場した機を捉えて、関連する自著を読者に紹介するためにこの部分を書き加えたのである。またその場合にバークマンの詳細な説明は必ずしも必要ではないとの判断から簡略化したのであろう。

5. アナーキズムと暴力の問題

ここで(3)主張の違いによる改作の可能性について考えてみたい。

前掲の表で見たように『ABC』の第11, 12, 19, 23章が章ごと削除されているのは、内容に関して不必要という判断があったためだろう。その場合もやはり、他の章と重複するから省略した、章の内容が中国の実情に合わないから削除した等の理由も考えられるので、削除された章すべてに主張の違いがあるとは言いきれないかもしれない。しかし、次のような個所はどうだろうか。

削除された章のうちとりわけ目を引くのが、Chapter 19. Is Anarchism Violence? (第19章「アナーキズムは暴力か?」)である。巴金はなぜこの章を削除したのだろうか。アナーキズムと暴力の問題は長く議論がされてきた問題で、巴金もかつて『無政府主義与恐怖主義 (アナーキズムとテロリズム)』

(1927) 等の文章で自らのこの問題に対する考えを披歴してきた。巴金の基本的な立場は「私はテロリズムに反対はしない。しかもテロリストには極めて敬服する⁽⁸⁾」としながら、しかし「私はテロを鼓吹し宣伝する行為には反対するし、またアナキズムとテロリズムを結び付けて、テロリズムがアナキズムを実現する一つの方法だと言うことには反対する⁽⁹⁾」と述べて、アナキストが革命の手段として暴力に頼ることは否定する。

そしてバークマンが第19章で書いている内容も、アナキズムとテロリズムを同一視する見方への反論を基調としているが、たとえば次の引用のように、アナキズムの原理としては暴力を排除するが個人的心情の表明としては理解できるという立場をとる。

As I have said, Anarchists have no monopoly on violence. On the contrary, the teachings of Anarchism are those of peace and harmony, of non-invasion, of the sacredness of life and liberty. But Anarchists are human, like the rest of mankind, and perhaps more so.

They are more sensitive to wrong and injustice, quicker to resent oppression, and therefore not exempt from occasionally voicing their protest by an act of violence. But such acts are an expression of individual temperament, not of any particular theory.

両者の暴力に対する認識ないしは心情は基本的には一致しているように見える。にもかかわらず巴金はこの章をあえて削除した理由はなんだろうか。以下は推測の域を出ないが、執筆時の時点で巴金はバークマンの論にある種の違和感を感じていたのではないだろうか。バークマン自身、ヘンリー・フリック暗殺未遂事件を起こすなど、テロリストとしての道を歩んできた過去を持つ人物である。第19章の冒頭でバークマンは、

I mean to speak to you honestly and frankly, and you can take my word for it, because it happens that I am just one of those Anarchists who are pointed out as men of violence and destruction. I ought to know, and I have nothing to hide.

と書き、「暴力と破壊の男として指弾された」自分がこれから現在の考えを包み隠さず語る、という姿勢を取っている。バークマンが語るからこそ、アナーキズムは暴力ではないという結論に重みが加わってくるのである。つまり第19章は、過去のテロリストであるバークマンの存在と結びついてはじめて意味を持ってくる。一般庶民向けの解説書として書いているこの本に、火傷をするような感情がこもった第19章をそのまま入れることに、巴金はとまどったのではないだろうか。もちろん、暴力を「心情的には理解できるが革命の手段としては用いない」という屈折した結論に到らざるを得ないことは、巴金にしても共通している。『断頭台上』や『革命的先駆』など、実際行動を起こして散って行った過去の革命家を称賛する著書を世に出している巴金は、バークマンの過去の実績にも共鳴する部分を感じていたことであろう。しかし解説書としてはどうなのかという違和感が、第19章削除として表れたのではないだろうか。

6. 共産主義アナーキズムとロシア革命批判

削除された章とは逆に、巴金は第二部第四章「階級闘争」、同第五章「革命的安那其主義」の2章を書き加えているが、その意図はどのあたりにあったのだろうか。第四章ではクロボトキンの文章の一節を引用し、人類社会にはもともと二つの階級——略奪階級と被略奪階級が存在することを説明する。そして「革命的アナーキズムは階級闘争の中で生まれたものである⁽¹⁰⁾」との説を展開する。第五章は第四章を受けて、しかしアナーキズムはクロボトキンが発明した思想でもないし、ほかの誰かが作り出したものでもない、「それはプロレタリアートがブルジョアに反抗する直接闘争の中から生まれてきたもので、労働者

の要求と重要の中から生まれたものである⁽¹¹⁾」と述べる。そして「真のアナキズムは一つしかない、つまり革命的アナキズムである⁽¹²⁾」, 「今、アナキズム全体を代表するものは革命的アナキ―共産主義だ⁽¹³⁾」と断定している。「序」に巴金は、「……二つには彼の考えが理想主義的すぎる部分があったからだ。しかしクロボトキンは違う。」と書いていた。巴金はバークマンの理想主義的な部分を修正し、クロボトキン流の現実的なアナキズム理論に近づけようとしていたのである。第二部第四、第五章でアナキズム革命が階級闘争をその本質とすること、現在のアナキズムは共産主義であることを独自に強調したのはその表現のひとつと考えられる。もともとバークマンの著書名にも Communist Anarchism という名称が使われており、そういう意味では単にアナキズムではなく共産主義アナキズムだと強調されてはいたのだが、巴金の改作を経て、一層明確に階級闘争を主張するなど方法論の点でより共産主義的色彩が強くなっている。

また巴金は「序」に、「ロシア革命は社会革命の可能性を示し、また労農階級の自己努力によって、革命の改造と防衛の多くの問題を解決した。言い換えれば、目的を達成せず失敗したロシア革命は逆にアナキズムのために多くの問題を解決してくれた。だからアナキズムの新しい著作が必要になっている。バークマンの著作は確かにこういった経験を十分に利用した⁽¹⁴⁾。」と書く。このことが具体的に表れているのが『ABC』の第15章から第19章であって、巴金はこの部分をほとんど手を加えずに翻訳していることがわかる。上述のようにバークマン（とゴールドマン）は革命後のロシアに2年間滞在し、ボルシェビキ政権下のロシア庶民の悲惨な現状を身をもって体験していた。巴金もやはり1925年頃には革命後ロシアのボルシェビキ政権およびレーニンを批判する文章を数篇書いており、同時にバークマンの『俄羅斯的悲劇（ロシアの悲劇）』⁽¹⁵⁾を翻訳もしている。これらのことから、巴金はバークマンのロシア革命批判論に十分な肯定を与え、革命の「失敗」を教訓としてアナキズム革命の啓蒙に生かしていくという意思があったことが察せられる。

以上、『資本主義からアナキズムへ』と『アナキズムのABC』の比較からいくつかの問題を考察した。まだ論及できていない箇所も少なくないが、初歩的な整理として今回はひとまずこれで筆を擱く。『資本主義からアナキズムへ』はその構成から文章の詳細に到るまで多くの部分をバークマンの著書に頼っているが、一方で巴金が独自のこだわりを見せた部分も少なからず発見できる。この著作は巴金青年期のアナキズム思想、とりわけアナキズム革命の実践に関しての展望と情熱を示しているものであり、一つの到達点を示すものであると思う。巴金は「序」に「私はいまや戦士ではないので、この本には扇動する情熱が欠けており、理論の解説だけしかない」と書いていたが、実際にはこの著作から伝わってくる情熱は決して小さくはなく、客観的にみて、1930年のこの時点における巴金はまだ「戦士」の風貌を残していると言っても過言ではない。

[注]

- (1) 初版本『霧』（1936年上海良友公司）に掲載された『愛情三部曲』「総序」にこの記載があったが、のち『巴金文集』収録時にはこの部分が削除されている。陳思和「重印後記」（2009年版『従資本主義到安那其主義』）の指摘による。
- (2) これについては、陳思和、李存光両氏の建議によってこの本を全集に収録することを巴金も一旦承諾したが、全集編集責任者の王仰晨氏が慎重な意見を表明したことにより結局収められないことになった、という経過を陳思和氏が『従資本主義到安那其主義』「重印後記」や『解説巴金』「巴金的意義（代序）」（2002年 春風文芸出版社）などに書いている。
- (3) 自由書店そのものが1928年に上海市公安局により摘発され、一旦封鎖されている。1928年6月1日『申報』に自由書店封鎖の市政府公告が見られることは、第10回巴金學術シンポジウム（2011年12月）における呉念聖氏の指摘によって明らかになった。巴金が参加した時期には自由書店は持ち直していたと思われるが、国民党政府から危険視されている存在であったことは想像できる。なお、『従資本主義到安那其主義』には出版社が「美国三藩市平社」（アメリカ・サンフランシスコ市平社）名義のものが存在するようだ。おそらくこういった発禁処分に対処するために平社の名義を隠れ蓑に使ったものであろう。
- (4) 山口守「關於 IISH 和 CIRA 所藏之巴金英文、法文書簡」（1996年東方出版社『巴金的世界』所収）
- (5) 1934年7月4日『大公報』に発表、1936年『生之懺悔』に収録。またこの文章はその

まま短編集『將軍』の「序一」となる。

- (6) 久田俊夫訳『アナキズムの ABC』（1981年4月、杉山書店）に付される「文献ノート」による。
- (7) Morgan, Astor はともにアメリカの富豪の名称。虞洽卿は上海総商會會長を務めた名士。
- (8) 原文「我不反对恐怖主义，并且对于“恐怖主义者”也极佩服。」
- (9) 原文「我却反对鼓吹和宣传恐怖主义的举动，而且我也反对把无政府主义和恐怖主义连在一起，说恐怖主义是实现无政府主义的一个方法。」
- (10) 原文「革命的安那其主义是在阶级斗争中产生的。」
- (11) 原文「它是从无产阶级反抗有产阶级的直接斗争中产生出来的，是从工人的要求和需要中产生出来的。」
- (12) 原文「真正的安那其主义就只有一个：革命的安那其共产主义。」
- (13) 原文「现在足以代表安那其主义全体的就是革命的安那其共产主义。」
- (14) 原文「俄国革命指示了社会革命之可能，而且靠工农阶级的自己努力，解决了许多革命的改造与防卫之问题。换言之未能达到目的而失败了的俄国革命却替安那其主义解决了许多问题。所以安那其主义的新的著作更是极其需要的了。柏克曼的著作确实是把这些经验充分地利用了。」
- (15) 1925年7月『民鐘』第1卷第12期，原題は *The Russian Tragedy*

* 本論文は2010-2011年在外研究(a)の成果である。